

吊い

ヒトのみの営み

太古の昔から、弔いの儀式は存在している

10万年前のネアンデルタール人や人類の起源であるホモサピエンスは埋葬をおこなっていた。

洞窟の中に穴を掘り葬った後や花を手向けた形跡などが発見された。

日本においては、『古事記』にアメノワカヒコ(天若日子)の亡くなった際の様子の記事がある。

喪屋を作って、食事を運ぶ係り、掃除係り、神へお供えをする係り、泣き女の係りなど各々担当を決め、八日八夜のあいだ、踊り食べのみ遊んで弔った。

古代大和では、遺体が腐敗し白骨化するまで、喪屋に安置し、遺された人は死者と時間をともにし、食事を供えたり、踊りを見せたりといった殯(モガリ)行われていた。

いまでも遺体に安置するときに、枕飯や枕団子を供えたり、ろうそくや線香の灯を絶やさなかったりすることがあるが、これは現代の殯の形といえる

死に対する恐れとけがれ意識

死の恐れる観念は、遺体が腐敗していく様を見て、もたらされた感情であるともいえる。死は「けがれ」という観念から、「忌」の期間が設けられ、穢れを移す期間と考えられていた。平安時代の『延喜式』（法令集）には、死に対する穢れの期間を30日とし、忌む日数が決められていたようだ。この穢れに触れたものは伝染していくものと思われていた。まだまだ葬儀や弔いは庶民にとっては一般的ではなく、『今昔物語』には、遺体が打ち捨てられていた記述もある。

仏教葬と火葬の起源

仏教伝来と共に、身分の高い階級においては仏教葬、火葬が定着していった。

聖徳太子の葬儀に仏僧が関わっていた。

持統天皇は葬儀の儉約を進め、火葬の仏教式で行われた。

現代に通じる葬送習俗

平安時代中頃には現代にも残る葬儀の原型が見られた

- ・臨終作法 沐浴(髪・体を洗い清める)、湯灌
- ・納棺 北枕
- ・出棺 葬礼の儀式(輿に乗せて運ばれる)
- ・荼毘 収骨の立ちあい、帰宅に際しての清め
- ・法事 七七の法事、一周忌の法事

鎌倉・室町

- ・火葬場での仏事(三頭念誦)が中心・・・火葬場において、奠湯・奠茶、読経
- ・善の綱、箸渡し・・・火葬場の所作

※南北朝時代農民結合体「惣村」が形成され地域の連携が生まれた

→土地の民族、風習と融合し、地域による仏教葬が生まれた

「惣村」に寺院が出来、葬祭や仏事が委託される関係より

檀家関係が誕生した

※当時は燃料の確保、火葬場が難しく民衆においては、土葬が多かった

江戸時代

地域共同体の精神的結び付きにより、惣村内の寺院が生まれ、「一家一寺」とし、幕府により寺請制度が制定された

檀家制度の法令化

宗旨人別帳(宗門改帳)

※寺請制度(=戸籍) 誕生、死亡など届出が必要

→檀家になることが義務付けられた

葬儀は寺院に必ずお願いすること

明治維新

神仏分離令と廃仏毀釈

国家神道を推し進めるため、寺院の破壊や、僧の還俗を促す

寺請制度の廃止

戸籍法改正など、檀家制度の法的根拠はなくなった。

(神葬祭の実施される)

信教の自由が定められる

仏教葬の法的根拠はなくなった

檀家制度はなくなったが、「家制度」の施策の中、檀家制度はその基盤となっていた。

地域の習俗として、受け継がれていった

明治以降

身分制度が取り払われ、葬儀の形にも変化がもたらされていった

- ・日中の大がかりな葬儀(特に商人)
大名行列を模した葬列の出現
- ・寝棺の増加
一回限りの白木あつらえの輿に入れ、葬列を組み大人数で運ぶようになった
(庶民においては座棺や駕籠で人力車が運ぶ)
- ・様々な装具の出現
葬列を彩るための道具→装具の発達＝貸葬具屋→葬儀社に
※大きな葬儀には人手が必要となり、葬儀社が人夫の手配をするようになった
- ・霊柩車の出現
葬列が交通の妨げとなるため、遺体を搬送する霊柩車が登場
- ・祭壇の出現
以前は枕飾り程度であったが、2段、3段と積み上がっていき、祭壇の形となった
- ・昭和初期 遺影写真の出現

戦後の葬儀

- ・葬具メーカーの出現により、祭壇も華やかになり、葬儀＝祭壇に
- ・互助会の誕生
- ・「葬祭サービス業」としての葬儀社
様々な業種からの発展や、病院等との連携なども増加
- ・自宅葬儀から葬儀会館葬が主流に

現代における葬儀の大きな変革

戦後の高度成長と共に派手になっていった葬儀や告別式だが、バブル期のハデ葬をピークにバブル崩壊や長引く不況の元、行き過ぎたセレモニー化した葬儀を見直す動きが出てきた。消費者意識の芽生えと共に、お仕着せの葬儀やあり方への疑問から、新たな家族葬が出現し、家族や身近な人たちの見送りが主流となって来た。

また、高齢者や独居の増加や格差の問題などが社会的問題となり、いわゆる無縁社会の問題点についてマスコミでも取り上げられるようになった。そのような背景もあり、葬儀についても一日葬、宗教儀礼を省く告別式などより簡素化が進み、直葬も登場するようになってきた。

では、葬儀の簡素化と見送ることは同一にとらえるべきことかどうか、単なる遺体処理として葬儀を捉えるのか、今一度考える必要があるのではないだろうか。

タイトルに掲げた

弔いを行うのは「人」のみである

ことを再確認してほしいと思う。